The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	leNとceNによる忠実照応
Author(s)	井元, 秀剛
Citation	フランス語学研究. 1989, 23, p. 25-39
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/57752
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Japanese Society of French Linguistics

le N と ce N による忠実照応

井 元 秀 剛

1. はじめに

二つの名詞句の照応が un moineau → ce moineau, un prince très malheureux → le prince のように共通のヘッドを持つ名詞句によって成される場合，これを『忠実照応』(anaphore fidèle) といい，un moineau → l'oiseau のように異なった名詞句によって成される場合，これを『非忠実照応』(anaphore infidèle) という．定冠詞を伴った名詞 le N と，指示形容詞を伴った名詞 ce N は，ともに前出の名詞をうける用法があり，(1) のようにどちらを使っても照応が可能な場合がある．

(1) Le prince entra dans un jardin. *Le / Ce jardin* était calme et paisible. (KLEIBER 1986b p. 1)

だが忠実照応の場合，意外な制約があって CORBLIN (1983) があげる (2), (3) の例では ce N と le N は交替不可能である．

(2) a. Une femme entra dans la pièce. J'avais vu *cette* femme chez mon ami. (CORBLIN, 1983, p. 118)

b. *Une femme entra dans la pièce. J'avais vu *la* femme chez mon ami.

(3) a. Tu verras un garçon et une fille. Tu dois donner une poupée à *la fille* et une voiture *au garçon*. (loc. cit.)

b. ??Tu verras un garçon et une fille. Tu dois donner une poupée à *cette fille* et une voiture à *ce garçon*.

直前に un N で提示された名詞句ながら，le N と ce N のどちらか一方を用いてしか忠実照応できないこの現象を，CORBLIN は『即時反復のパラドックス』(Paradoxe de la reprise immédiate) と呼んだ．le N と ce N による忠実照応が可能になる条件を探ることで，このパラドックスに説明を与えるのが本稿の目的である．

NII-Electronic Library Service

Japanese Society of French Linguistics

2. パラドックスに対する従来の考え方

2.1. CORBLIN (1983), 春木 (1986)

CORBLIN は BLANCHE-BENVENISTE et CHERVEL (1966) の説をひいて le N はクラスとクラスの間に生ずる対立 (contraste externe) を背景にして使われ, ce N はクラス内の特定の成員と他の成員との間の対立 (contraste interne) を背景に使われる, という説を展開した. これに従うと (2) では先行文[1]に femme の語彙領域に対立する要素はなく, ce N を用いる他はない(この時 cette femme は言外にある d'autres femmes と対立することになる). これに対し, (3) では un garçon と une fille の間に contraste externe が生じて, le N による受け直しが可能になるばかりでなく, contraste interne が感じられないので ce N による受け直しが困難になる, と説明される. le N の場合, CORBLIN によれば contraste externe を成立させるものは un garçon, une fille といった意味的に隣接したものである必要はなく, dictionnaire と pièce というように共通の意義素をほとんどもたない名詞のクラスの間にも成立する.

(4) a. Il y a une dictionnaire sur la table. ??*Le dictionnaire* est ouvert.
b. Il y a un dictionnaire sur la table. La pièce est sombre. *Le dictionnaire* est ouvert. (CORBLIN, 1983, p. 129)

a が不可で b が可になることから, b では la pièce が dictionnaire に対立の要素を提供していると考えられる.

また, 対立は先行文の中に生じている必要もない. (5) は belle princesse が le prince の後に生じているが, これが prince に対して contraste externe を提供することにより le N が使用されている.

(5) Il était une fois un prince très malheureux ; *le prince* aimait une belle princesse qui ne l'aimait pas. (op. cit. p 131)

要するに, CORBLIN によれば, le N が使用される前後に他の名詞句があれば, その意味がどのようなものであれ, そこに contraste externe が成立し, le N が可能になるというわけである.

この規則は, いかなる場合にも機械的に適応できるから, 極めて魅力的な仮説であるが, 二つの大きな欠陥がある. 一つは小野, 春木が指摘したように, CORBLIN 自身が持ち出した例 (2) にも femme 以外に la pièce という名詞句が存在するのに la femme が使えないというのは彼の説に反するということ, もう一つは, CORBLIN が唯一絶対の条件とした「対立」が存在しないにもかかわらず, ce N より le N が好まれる例が存在すると言うことである. 春木(1986)はこの種の例として(6), (7) を挙げる.

(6) Ils ont eu un enfant. *L'enfant* se porte bien. (春木, 1986, p. 18)

NII-Electronic Library Service

Japanese Society of French Linguistics

(7) Notre grand-père a fait *un testament*. *Le testament* fait mention de... (loc. cit.)

これらの事実をふまえて，春木は，le N について CORBLIN の説を修正し，さらに包括的な仮説(8)を提示した．

(8) ある名詞句の指すものが discours の中で持つ指示対象としての資格が確立されていればいるほど，le N による反復がより可能になる．(春木，1986 p. 19)

この仮説の出発点になったのは (9) の例である．

(9) a. Je viens d'acheter un livre. *Le livre m'intéressait depuis longtemps. (loc. cit.)

b. Je viens d'acheter un livre de Chomsky sur la question de la liberté politique. Le livre m'intéressait depuis longtemps. (loc. cit.)

ここで b は a に比べて livre がより特定化され，容認性が高い．つまり，それだけディスクールにおける安定性が増したということである．CORBLIN らの言う対立も，それによって名詞を特定化させディスクールの安定性を増す一つの要因にすぎないと説く．

ただどのような条件を満たせば名詞が特定化されるのかという問題が残る．(6) の enfant, (7) の testament が特定化されるのに，なぜ (4) a の dictionnaire や (9) a の livre が特定化されないのだろうか．さらに筆者の調査では春木が出発点にした (9) b の容認度もあまり高くはない．この照応文を Je m'intéressais *au livre* とすると照応はほとんど不可能である[2]．先行文は一見すると多くの修飾語がついてかなり特定化されたように見えるのに，それでも le N が使われにくいのはなぜなのだろうか，どうすることがディスクールの中における N の安定性を増すことになるのか，さらに考察を加える余地が残されている．本稿では春木が (6) の enfant に付した注[3]のなかで示唆した『指示の網』(réseau de référence) の考え方を押し進める方向でこの問題に取り組んでみたいと思っている．

2.2. KLEIBER (1986b, 1986c)

KLEIBER は全く別の観点からこのパラドックスを説明する．彼はまず『評価状況』(circonstances d'évaluation) と『発話文脈』(contexte d'énonciation) を区別する．前者は le N が指示対象を特定する場であり，そこには N で呼ばれる要素が唯一存在する．後者については明確な定義が与えられていないが，いわゆる文脈のことで，名詞句が生起した前後の発話を指すらしい．この区別に基づき，KLEIBER は『発話文脈』の中で先行詞を直接指示するのが ce N で，一旦『評価状況』を介して，間接的に先行詞と同一の指示対象を持つのが le N であるとした．要す

NII-Electronic Library Service

Japanese Society of French Linguistics

るに le N を用いるか ce N を用いるかは，照応詞と先行詞の関係が間接的指示か直接的指示かによるわけである．この二つの指示の違いを KLEIBER (1986b, p. 4) は (10) と (11) の文で例示する．

(10) a. Le président est parti.
b. Le président lit.
c. Le président dort.

(11) a. Ce président est parti.
b. Ce président lit.
c. Ce président dort.

これらの文が，同一の発話の中でばらばらに，つまり離れた位置に生じたと想定しよう．(11) の場合それぞれの文の前に必ず先行詞があって ce président は出現のたびごとに，異なった先行詞を直接指示していくが，(10) の場合は生起とは無関係に一旦共通の『評価状況』(例えば現在のフランス) を介して，その中に存在する唯一の président を間接的に指示するのである．

この考え方に従うと，(1) は直接的にも間接的にも指示が可能な場合，(2) は直接的指示のみ，(3) は間接的指示のみが可能な場合ということになる．なぜそうなるかは個別に説明しなければならない．(2) の場合，先行文と照応文の間には場面の転換がある．つまり，照応文は先行文が提示する (であろう)『評価状況』とは別の所で femme を問題にしているので『評価状況』を介した間接指示はできない．(3) は等位接続の場合であり，KLEIBER はこれを別立てにして説明する．A et B という形からなる名詞句は全体がひとまとまりで提示されるので，A なら A, B なら B だけを直接指示することはできず，間接指示の le N によらねばならないのである．

個々の例についての KLEIBER の説明は妥当だが，間接指示の場合に不可欠な『評価状況』というのがどのようなものなのか今ひとつ判然としない．(10) の場合，それは話し手と聞き手が共有する一般知識によって与えられているが，我々が問題にしている忠実照応の場合，(1) (3) のように先行文によって与えられる．ところが，(1) の場合，『評価状況』は先行文が語っている場面を基礎に構築されるらしいのに，(3) の場合，場面とは無関係に等位接続された名詞句によって構築され，(1) とは，異質な印象を受ける．等位接続は特別な場合だから別に考えるとしても，先行文が『評価状況』を提示する条件については明確にする必要があろう．(2) の場合は場面の転換があるから比較的わかりやすいが，(1) が『評価状況』を提示するのに (4) a が提示しないのはなぜか，という疑問がわく．この点に関して KLEIBER が用意しているのは次の例である．

(12) a. J'ai rencontré un ami. ?L'ami... (KLEIBER, 1986c, p. 61)
b. Hassan II a rencontré un représentant du Polisalio. Le repré-

NII-Electronic Library Service

Japanese Society of French Linguistics

sentant du Porisalio était accompagné de trois gardes du corps (loc. cit.)

a の先行文は un ami を提示する役割しか果たしていないが，b の先行文は「会見」を語っており，un représentant du Polisalio はその一つの要素であるので，「会見」という『評価状況』を介して，le N で受け直しが可能であるとする．だが先行文が単なる指示対象の提示の役割しかになっていないか，そうでないかの判断は極めて難しい．a はたとえ二義的であるとしても，「友との出会い」を語った文であることに変わりはなく，この「出会い」が『評価状況』とならないことは，すなおに納得し難い．

本稿は KLEIBER の考えを基本的に受け継ぎつつも，あいまいな操作概念を再定義し，KLEIBER の言う『評価状況』成立の条件を探る方向で論を進めていきたい．

3. le N

3.1. 『発話内世界』の一貫性

まず，『発話状況』(circonstances d'énonciation)，『発話内世界』(monde énoncé) を設定する．前者は KLEIBER の『発話文脈』，後者は『評価状況』に対応するが，ここでは独自の定義を行う．『発話状況』は話し手と聞き手が発話行為をおこなっている場であり，ici と maintenant というふたつの副詞で指示される．これに対し，『発話内世界』は発話が語る場面であり，発話内容が有効性を持つ場と定義される．J'ai vu une voiture hier. という発話についていえば，「車を見た」という行為は hier という副詞が限定する特定の時間，さらに特定の場所の中においてのみ有効であり，それが『発話内世界』である．個々の発話文は必ず『発話内世界』を持つが，それがどこに位置づけられるかは解釈の問題で，① 先行文脈 ② 発話文の意味内容 ③ 発話文の時制及び副詞句，の三つの影響をうける．『発話内世界』の中に存在する物は，先行文脈，当該の発話で述べられたもの以外に，その場面に関する一般的知識から存在が推定されるものも含まれている．「昨日出産があった」と言えば，その『発話内世界』の中に，「母親」や「赤ん坊」が存在しているのは当然であろう．

le N に関して筆者が提示する仮説は次の様なものである．

(13) 指示対象が『発話内世界』の中に唯一存在し，かつ『発話内世界』における位置づけが明確になっている時，それを le N で指示することが可能である．

(13) は春木の (8) に相当する一般原理で，照応表現にとどまらず，すべての le N にあてはまる条件である．指示対象の資格を，ディスクールではなく『発話内世界』に限定していることに注目されたい．忠実照応は，先行文がその『発話内世界』に提示した N を照応文がとりあげる表現だから，先行文と照応文の『発話内世界』

NII-Electronic Library Service

Japanese Society of French Linguistics

は一貫したものでなければいけない．(14) はこれで説明できる．

(14) a. Un avion s'est écrasé hier. L'avion transportait 100 personnes. (KLEIBER 1986b, p. 12)

b. Un avion s'est écrasé hier. ?L'avion relie habituellement Miami à New York. (loc. cit.)

a では二つの文とも同一の『発話内世界』の中で読むことが可能なのに対し，b は照応文の relie habituellement Miami à New York が時間的・空間的に先行文の『発話内世界』の枠を超えさせている．(2) b も同様である．照応文は大過去におかれ，先行文と同一の枠内で解釈することはできない．映画なら回想場面にしなくてはならないところである．(9) b の容認性の意外な低さもこれで説明しうるのではないかと思う．照応文を先行文の commentaire と解釈することもできなくはないが，先行文は売買の場を『発話内世界』とし，照応文は話者の関心を『発話内世界』とするものと感じられて，『発話内世界』の一貫性が保たれにくくなっているのである．

3.2. 『発話内世界』における位置づけ

次に，『発話内世界』における位置づけの問題を考える．

(4) a の先行文は全くコンテクストなしで使われると，『発話内世界』のイメージがわいてこない．そこにもともと table があって，さらに dictionnaire があることが示されているだけで，他にどのようなものがどのような資格で存在しているのかはっきりしないのである．だが，この文が演劇の舞台設定を指示している文であるとすると (4) a 全体が全く問題のない発話になると言う (KLEIBER 1986c)．この場合，『発話内世界』が劇場の舞台を語っている場と解釈されて，dictionnaire が舞台装置という資格で『発話内世界』に位置づけられるのである．b の場合は，pièce に言及することで，『発話内世界』が pièce を含む大きなアングルでとらえ直されて dictionnaire の位置づけが明確になるのであろう．

『発話内世界』における位置づけは，春木の言うディスクールにおける安定性，KLEIBER の言う『評価状況』の成立，に相当する考え方で，どうしたら位置づけられたことになるのか，できるだけ客観的な基準が必要であろう．筆者は，N を le N で取り上げようとする時に，同じ『発話内世界』の中に，他にも言及に値する対象が存在していると感じられるかどうか，ということが N の位置づけが充分かどうかの基準になると考えている．a では，舞台を語っていることがわかれば，照応文のところで dictionnaire 以外のものを取り上げる可能性が生じてくるし，b でも pièce に話を進めた時点で，pièce にまつわるどんな話が次に飛び出すかわからなくなる．このように le N が生じた所では，常に同じ『発話内世界』の他の要素が指示をうける可能性を持っていたことになり，これらの要素と le N の指示対象は範列の関係にあると言っていい．この範列は個々の文脈の中で成立する関係だか

NII-Electronic Library Service

Japanese Society of French Linguistics

ら，筆者は le N の指示対象とその文脈における他の潜在的な指示対象からなる集合を le N の『文脈範列体』(paradigme contextuel) と名付けてみたい．N の指示対象が『発話内世界』の中で位置づけを明確にするということは，それが『文脈範列体』を構築する，ということである．

このように，『発話内世界』と『文脈範列体』の二本だてで考えることにより，KLEIBER のように『評価状況』一本やりでいくより現象を統一的に説明できるように思う．先ず等位接続を別立にしなくとも，なぜそれが le N の容認度を上げるのかが明確になる．要するに，等位接続で結ばれた名詞句が相互に『文脈範列体』を構築しているのである．また KLEIBER が単なる指示対象の提示で『評価状況』を提供しないと説明する (12) a の例なども，『発話内世界』に指示対象が位置づけられず，le N の『文脈範列体』が構築されないと考えればよい．

CORBLIN が『対立』(contraste) に注目したことも理解できる．対立は『文脈範列体』を構築する要因になりうるからである．ただ『文脈範列体』は，明示的に語られた語彙領域の対比によってのみ作り出されるものではない．文脈によっては，他の要素が明示されていなくても，『文脈範列体』の成立が明らかで le N が可能な場合がある．(6), (7) がそれである．(6) では「出産の場」，(7) では「遺産相続の場」が『発話内世界』になっており，「子供」，「遺言書」の位置づけは明確であろう．(6) で子供ではなく母親の話をしても，(7) で遺言書ではなく法律の話をしても，同じ『発話内世界』の中からディスクールを継続でき，これらが，l'enfant, le testament の『文脈範列体』を構築しているのである．(6) を (15) のようにしても，照応文の l'enfant の同定に全く差は感じられない．

(15) Hier il y a eu un accouchement. L'enfant se porte bien.

(6) も (15) も同一の要素によって l'enfant の『文脈範列体』が形成されていると考えられる．N と『文脈範列体』の他の要素との関係はまた，『対立』と形容されるほど強いものである必要もない．(6) や (15) で L'enfant se porte bien. と言ったところで，「母親」の健康が必ずしも危ぶまれる必要はないのである．「母親」(を始めとして『文脈範列体』の他の要素) の存在が感じられれば充分である．

3.3. 『文脈範列体』の構築

再び (4) の例に戻ろう．

(4) c. Il y a un dictionnaire et une montre sur la table. *Le* dictionnaire est ouvert. (CORBLIN, 1983, p. 129)

d. Il y a un dictionnaire sur une table. *Le* dictionnaire est ouvert.

e. Il y a un dictionnaire sur la très jolie table que mon oncle a achetée l'année dernière. *Le* dictionnaire est ouvert.

dictionnaire の『文脈範列体』を構築するには，c のように新たに別の名詞句を導入すればよいが，筆者の調査では la table を d のように変えるとかなり容認度が

NII-Electronic Library Service

Japanese Society of French Linguistics

増大する．そして興味深いことに d を先に見せておいて a を提示すると d よりは悪いがこれも可能だというインフォーマントがかなりいることである．今の場合は table をどのように捉えるかということであろう．何も言わずに a を見せた時，table にはあまり関心が払われず，それはその後の発話において言及に値しないものと感じられ，dictionnaire の『文脈範列体』の構築に貢献しないが，d, e のようになると，table が dictionnaire と同じようにこの位置で言及を受ける可能性をもっていたと感じられて，dictionnaire の『文脈範列体』の中に取り込まれるのではないだろうか．これは，認知，解釈の問題である．b を見せた後の a の反応からも察せられるように，他の要素が定名詞句で使われていれば『文脈範列体』が成立し，不定名詞句であれば『文脈範列体』が成立し得ないと形式的に規定できるものではない．ただ，不定名詞句で現れたものはその『発話内世界』に新たに導入された要素として，dictionnaire の『文脈範列体』の中に取り込まれやすい，ということは言えるであろう．ここでは全く同じ統語的位置で，la table が une table に代わった時の table の捉え方の変化に注目したい．我々はディスクールの中に出てくる名詞句をすべて同じような関心で捉えているわけではない．名詞句に対する関心度・注意度には差があって，我々は無意識のうちに重要なものとそうでないものとを区別しているのである．この重要度の差は，話者の関心の持ち方によってずれが生じることはもちろんであるが，すべての話者に共通の傾向は存在しよう（旧情報より新情報が高いというような）．この注意度・関心度の度合を抽象化して『注意度』(degré d'attention) と呼ぶことにし，N の注意度を DA (N) と書くことにする．これが普遍的な概念となるためには言語学的な指標が不可欠であるので，注意度の差は次に発話される文の中で代名詞化され易さの度合の差となって現れるという仮説を出発点に，注意度を規定していきたい．つまり『注意度』(DA) を，発話の一定の時点において名詞句が持つ代名詞化されやすさの度合いと定義する．この定義は，代名詞は独自の意味情報を持っていないから，最も関心の払われる名詞が先行詞になりやすいであろう，という仮説に基づいている．例えば，Une femme entra dans la pièce. とあればその直後に Elle était blonde. と une femme は代名詞化できるのに対し，*Elle était chauffée par une cheminée. と pièce は代名詞化できないから une femme の注意度は高く，la pièce の注意度は低い，ということになる．DA の実体を解明するためには代名詞とその指示対象との関係をより細部にわたって研究することが必要であるが，筆者の主張はそういった代名詞化の度合いが le N, ce N による受け直しの可能性に間接的に影響しているということにある．

名詞句の DA に関して，経験的に次のような傾向を指摘しうるであろう．

① ディスクールに導入された位置から離れれば離れるほど DA は低くなる．

② 動作主性の高いものほど DA も高い．

NII-Electronic Library Service

Japanese Society of French Linguistics

③ 主語，目的格補語の位置にある名詞句のほうが前置詞の補語にあらわれた名詞より DA が高い.

④ 焦点の位置にある名詞句は他の位置にある名詞句より DA が高い.

⑤ 新情報をになう名詞句の方が旧情報をになう名詞句より DA が高い.

⑥ 修飾語句が付加された名詞句はそうでない名詞句より DA が高い.

DA はまた相対的な概念であり，ある文脈における他の名詞句との関係によって決まるものである．ここで主張したい仮説は次のようなものである[4)].

(16) DA (N) が低いものほど『文脈範列体』を構築しやすい.

これは『文脈範列体』に属する他の要素の存在を感じさせることによる．問題となっている N の DA を下げるためには，そこに現れた他の名詞句の DA を上げればよい．(4) はまさにその例である．d は旧情報→新情報の転換 ⑤ により，e は修飾部の付加 ⑥ により DA (table) をあげ DA (dictionnaire) を相対的に下げている．(17) a は CHAROLLES の例で，avec une grange の付加によって la maison の受け直しが可能になると説く.

(17) Jérôme vient d'acheter une maison avec une grange.

a. (suite) La maison est grande et a du cachet. (CHAROLLES, 1978, p. 16)

b. (suite) La grange est très grande.

これも (4) d の形と同様であるが，この (17) a についても難色を示すインフォーマントがいた．だがそのインフォーマントにとっても b の受け直しは全く問題がない．この事実も DA (maison)>DA (grange) の状況で grange の方がとりあげ易いということの傍証になる．(2) b の先行文と照応文を同一の『発話内世界』においた (2) c もインフォーマントによって判定にばらつきがある例である.

(2) c. Une femme entra dans la pièce. *La femme* avait une valise.

今の場合，先行文の『発話内世界』をどう捉えるかということ，特に la pièce の感じ方が問題である．femme を la pièce のなかに位置づけ，la pièce そのもの，あるいは la pièce のなかに存在するものとともに femme が『文脈範列体』を構築していると感じられれば la femme は可能であるが，femme の置かれた状況を想像しようとしないインフォーマントにとっては，la femme は不自然ということになる．la femme を認めた場合でも，発話がこれだけでは完結せず，Et... と続いていくような感じが残ると言う．この後の文においても同一の『文脈範列体』の中から要素を抽出することによって『文脈範列体』を安定させようとする心理が働いているように思う．(2) c で pièce の DA をあげれば全く問題はなくなる.

(2) d. Une femme entra dans la pièce décorée d'une façon classique dans le style Louis XV. *La femme* avait une valise.

また (2) c とほとんど似た構造である (1) も全く問題はない．(1) は le prince と

NII-Electronic Library Service

Japanese Society of French Linguistics

いう DA の大きい名詞句が存在し，かつ un jardin が前置詞の補語という DA の弱い位置に生じ，背景を形成しているために DA (jardin) が低く感じられ，物語世界の構成物というような『文脈範列体』の中から le jardin が選ばれたのではないかと考えられる．

実際に使われた le N の例を見てみると，他の要素の導入で，一旦 DA の低下した名詞句を再度取り上げようとするような場合が多い．

(18) Cuôi essaie en vain de sortir de sa cage lorsqu'il voit passer *un aveugle*. Tout content, Cuôi lui crie:
—— Si tu veux recouvrer la vue, approche-toi de moi.
L'aveugle se dirige à tâtons dans la direction de la voix.
(NGUYEN-NGA, *Cuôi. Le garçon dans la lune*)

ここでは un aveugle 導入の後，主人公 Cuôi に言及されている，そのために un aveugle の DA が低下したのである．(この位置で il で受けうるのは Cuôi であって aveugle ではなく，aveugle の DA は低い).

4. ce N

4.1. 『発話状況』における現存

ce N には照応の用法以外に，言語外現実に存在するものを取り上げる直示的用法がある．目の前にある本を指して Prenez *ce livre*. と言う発話がそれである．この時ここで言及される本は『発話状況』の中に現存していなければならない．例えば隣の部屋の机の上にある本を指して，Prenez *ce livre* rouge sur le bureau. とは言えない．当該の本が『発話状況』にないので，どの本を指すのかはっきりしないからである．筆者は ce N の照応の用法は，この直示的用法の延長にあり，指示対象現存の条件は，形をかえて照応の用法にも受け継がれていると考えている．例えば直示的用法でカナダの地図を指差して，「この国ではフランス語が話されている」と言う時，「カナダの国」そのものは『発話状況』の中に存在しないが，地図と国が語用論的なコネクターで結ばれており，『発話状況』の中に「カナダの国」が存在していることと同じことになる．照応の場合もこれと同じで話者が先行文で指示対象に言及することにより，それを『発話状況』の中に取り込んでいると考えればよい．照応文で ce N によってこれを受けることは，先の例における地図を指差すかのように，『発話状況』の位置から指示対象を指示しているのである．従って ce N が使用される第一条件は

(19) ce N で取り上げる指示対象が，言及をうけ，『発話状況』に現存していなければならない．

(6) と (15) はほぼ同じ内容を表しているのに，(15) の l'enfant を cet enfant にかえることができないのは，(15) では言及を受けていないことで enfant が『発話

NII-Electronic Library Service

Japanese Society of French Linguistics

状況』に現存していないことを示している.

われわれが問題にしている忠実照応の場合は,(19) は当初から満たされているので,ce N は le N に比べて使用の制限がゆるく,後に述べる特殊の場合を除けば,ほとんどすべての場合に使用が可能である.先行詞が導入された『発話内世界』がどのようなものであれ,言及されさえしていれば,それは基本的には『発話状況』に現存しているからである.le N が語られている場(発話内世界),ce N が語っている場(発話状況)を基調とした表現であることは,この二つのもつニュアンスの違いを説明してくれる.(6) の l'enfant を cet enfant に代えても容認度に差はない.だが le N の場合,医者が発した発話のようなニュアンスがあると言う.医者は出産の重要な関与者であり,医者にとって enfant の位置づけは明瞭である.このような場合には le N がより適切であろう.ce N は,出産の事実を話者のレベルで『発話状況』に取り込み,『発話内世界』とは無関係に指示するので,『発話内世界』の他の要素との関連は絶たれてしまう.(7) の場合も le N を使ったこの発話は相続人の一人によって発せられたようなニュアンスがあるらしい.これも相続人にとってはその場における関心の対象が明確であり,「遺言書」の位置づけがはっきりしていると感じられるからであろう.ここは ce N でも全く問題はないが,今述べたようなニュアンスは失われてしまう.遺産相続の関心の中で testament が指示されるわけではないからである.『発話内世界』の中で指示対象の占めている位置が明らかな場合,『発話状況』からの ce N による言及は,『発話内世界』内部の連続性を絶って,かえって奇異に感じられる場合もある.春木のあげる(20)の例がそうである.

(20) (レストランから Gaston に当選した宝くじのことで電話した Didier は,Gaston の妻の Berthe から昨夜 Gaston が急死したことを知らされ,妻の Sylvie が待つ席に戻ってきてそれを報告する.) Sylvie voit la figure de son mari et dit: «Gaston a perdu le billet, n'est-ce pas? —— Gaston n'a rien perdu: il est mort hier soir. Le cœur. Berthe a envoyé *un télégramme*. *Le télégramme* est à la maison, sûrement.» (BOILEAU-NARCEJAC)

この場合,当該の文の『発話内世界』は Gaston の死を伝える場と考えられよう.語り手 Didier にとってその場はあまりに明確であり,『発話内世界』の中にいる人物の立場でこの電報を語るのがふさわしく,『発話状況』のレベルでこの電報を ce télégramme と呼ぶにはあまりに意味がありすぎるのである.一般に le N が文学的な文体により多く現れることもこのことと関係しているように思う.le N を使った場合,既に物語世界の中で位置づけのはっきりしている指示対象を,le N で取り出してきたと言うニュアンスが生じ,読者を物語世界のなかに引き込む効果があるのであろう.

NII-Electronic Library Service

Japanese Society of French Linguistics

『注意度』の観点から (19) の原理を検討してみよう．現存は言及することによって与えられると述べたが，言及した時点から発話が進行すればするほど ce N による受け直しは難しくなる．だが，その名詞句が重要な意味をになっていれば多少離れていても ce N は可能であろう．結局 N の現存の問題は DA (N) の高さの問題に帰着する．DA の観点から条件 (19) を言い換えると「ce N で受け直すためには一定以上の注意度を備えていなければならない」ということになる．

パラドックスの二番目の側面である (3) b の容認性の低さはこの DA の欠如ということで説明しうると思う．(3) b とほぼ同内容の Tu verras un garçon avec une fille. Tu dois donner une voiture à *ce garçon.* は全く問題がない．等位接続は統語的に極めて特殊な位置にある．そこで結ばれた二つの名詞句のどちらか一方だけについて c'est...que を用いた有標の焦点化を行うことはできない．

(21) *C'est une voiture que j'ai vu et un camion.

またどちらか一方だけを代名詞化しようとするとそれは ce N よりさらに悪くなる．

(22) J'ai vu une voiture et un camion.

(a) ?Cette voiture roulait vite.

(b) *Elle roulait vite.

よって定義により，等位接続の場合，注意度は二つの名詞句の全体が持つのであってそのうちの一方が単独で持つ注意度はかなり低い，ということになる．結局 (19) を発展させた注意度の条件を満たせないことで (3) b の容認度の低さは説明しうる．

4.2. 指示対象の特殊性

(19) は ce N の第一条件であるが，これに「N の指示対象は N としての特殊性を備えていなければならない」という条件をつけ加えることができる．これが満たされないために排除される場合が二つある．一つは ce N で取り上げられる N 以外の N のメンバーが存在しない場合で，最上級や総称名詞句などがこれにあたる．

(23) La plus belle fille du monde ne peut prendre que ce que les hommes ont.

*Cette plus belle fille du monde... (KLEIBER, 1984, p. 76)

(24) Un cheval est un mammifère...*Ce cheval se laisse domestiquer.

他の一つは，単一判断の主語に ce N が現れる場合である．ce N はその déictique な性格から，対象の認知が行われるので，「父親は(どうしたかといえば)帰ってきた」タイプの二重判断の文の主語にはなりえても，単なる「父親の帰宅」を告げる「父親が帰ってきた」タイプの単一判断の文の主語にはなりえない．(25) が排

NII-Electronic Library Service

Japanese Society of French Linguistics

除されるのはこのためである[5].

(25) Deux voyageurs attendent un train.

?Ce train arrive. (KLEIBER, 1987, p. 121)

照応文の prédicat が ce N の特殊性を保証するような内容であれば，必然的にそれは二重判断の文になるであろう.

5. むすび

le N による忠実照応は，先行文と照応文が『発話内世界』を共有し，かつ指示対象がそこに存在すると思われる他の要素と『文脈範列体』を構築している時可能である. ce N による忠実照応は，言及をうけた先行詞が『発話状況』における「現存」を維持し，かつ N としての特殊性をもっている時可能である.『文脈範列体』の構築，『発話状況』の現存には『注意度』(Degré d'attention) が介在していて，『注意度』が低いものほど le N に適し，高いものほど ce N に適していると言うことができる.

以上が本稿の結論であるが，最後にこれまで問題にしてきた先行詞の注意度ではなく，照応詞の注意度について一言ふれておきたい。詳しい議論は省略するが，おおよそ DA (il)<DA (le N)<DA (ce N) ということが言えると思う. DA は相対的なものだから，主語の DA が低いと主語以外の所に関心が集まるだろう. 例えば Ce voleur a acheté une voiture. と言うより，Il a acheté une voiture と言った方が「車を買った」ことを伝える効果が高い. この観点から (20), (25) を眺めてみると面白い事に気付く. これらは ce N より le N が好まれた例だが，いずれの場合も le N 以外の所に関心の中心がある. (20) は télégramme そのものよりも，それが家に確かに有ることが問題なのである. le N を使って DA (télégramme) を下げることで est à la maison を強めることができよう. (25) も同様である. 前述したようにこれは単一判断の文であり，どの列車が到着するかではなく，列車が到着することが問題なのである. ce train を le train に代えることで適格な文が得られる. ただ動詞句にも名詞句の DA と同じような考え方が適用できるのかなど様々な問題が残されておりこれからの課題としたい.

(東京大学大学院博士課程)

[注]

1) 先行詞 un が生じた文を先行文，le N で un N を受け直した文を照応文と呼ぶことにする.

2) 春木氏からこれがより悪いのは livre がテームの位置を外されるからであるという指摘があった. この点について春木(1986)では「discours の連続性と ce N」(pp. 20-21) の項目のなかで特定化とからめて論じられている. 後続文でテームの位置にある名詞は先行文のなかで特定化されているという再解釈を受けやすく，そうでないときには先行の発話との連続性が失われてしまう，と説いている. 本稿では照応詞による先行詞の再解釈の考え方は取らないが，後で展開する『発話内世界』の一貫性という

NII-Electronic Library Service

Japanese Society of French Linguistics

議論は氏の discours の連続性という議論と共通するものである.

3) 春木(1986) p. 31, 注8に, この発話では「子供と親の関係によって作りだされる réseau de référence が le N を可能にする主要因と考えられる」と述べている.

4) (16)は必要条件ではない. 例えば(6)の場合, DA (enfant) は高くても, 意味的に『文脈範列体』の存在を感じさせるから le N が可能なのである.

5) 一編集委員から中立叙述(または現象文)(目の前で起こっている事件の報告, 地下から地上に出, 雨が降っているのに気付き,「あっ, 雨が降っている」と発話するたぐいのもの)と解釈される発話には ce N は使えないのではないか, という指摘があった. 中立叙述は単一判断であるから, 筆者の議論と同内容のことを言っているのだと思われる. なお単一判断・二重判断の区別については KURODA (1973), 木下 (1978) 等参照.

[参考文献]

BLANCHE-BENVENISTE, C. et CHERVEL, A. (1966): « Recherche sur le syntagme substantif », *Cahier de lexicologie* 9, pp. 3-37.

BONNARD, H. (1972): « Les mots démonstratifs », *Grand Larousse de la langue française*, tome 2, p. 1206-7.

CORBLIN, F. (1983): « Défini et démonstratif dans la reprise immédiate », *Le français moderne* 51, pp. 118-134.

CHAROLLES, M. (1978): « Introduction aux problèmes de la cohérence des textes », *Langue française* 38, pp. 7-41.

DUCROT, O. (1972): *Le dire et ne pas dire*, Paris, Hermann.

FAUCONNIER, G. (1984): *Espaces mentaux*, Paris, Editions de Minuit. 坂原茂他訳『メンタルスペース』白水社, 1987.

FIRBAS, J. (1966): « Non-thematic subjects in contemporary English », *Travaux linguistique de Prague*, pp. 239-256, Prague, Academia.

FURUKAWA, N. (1986): *L'article et le problème de la référence en français*, Tokyo, France Tosho.

GUILLAUME, G. (1919): *Le problème de l'article et sa solution dans la langue française*, réédition, Paris, Nizet, 1975.

春木仁孝 (1986):「指示形容詞を用いた前方照応について」,『フランス語学研究』20号.

HAWKINS, J. A. (1978): *Definiteness and Indefiniteness, A study in Reference and Grammaticality Prediction*, London, Croom Helm.

木下光一 (1978):「フランス語の非人称ヴァリアントと発話の意味構造」,『フランス語学研究』12号.

KLEIBER, G. (1983a): «Article défini, théorie de la localisation et présupposition existentielle », *Langue française* 57, pp. 87-105.

——— (1983b): « Les démonstratif (dé) montrent-ils? ou Sur le sens référentiel des adjectifs et pronoms démonstratifs », *Le français moderne*, 51-2, pp. 99-117.

——— (1984): « Sur la sémantique des descriptions démonstratives », *Linguisticae Investigationes* VIII-1, p. 63-85.

——— (1986a): «A propos de l'analyse *adjectif démonstratif=article défini+élément déictique ou* sur l'irréductibilité des symboles indexicaux », *Actes du 17e Congrès International de linguistique et philologie romanes*, 29, août-3 sep-

NII-Electronic Library Service

Japanese Society of French Linguistics

tembre 1983) vol. 4, pp. 195-212, Marseille, Publications Université de Provence.

——— (1986b): *Sur les emplois anaphoriques et situationnels de l'article défini et de l'adjectif démonstratif*, 17 pages dact.

——— (1986c): « Pour une explication du paradoxe de la reprise immédiate », *Langue française* 72, pp. 54-79.

——— (1987): " L'énigme du Vintimille ou les déterminants « à quai » ", *Langue française* 75, pp. 107-121.

KURODA, S. Y. (1973): « Le jugement catégorique et le jugement thétique; exemples tirés de la syntaxe japonaise », *Langages*, 30, pp. 81-110.

MILNER, J.-Cl. (1982): *Ordre et raison de langue*, Paris, Seuil.

三藤博 (1988):「メンタルスペース理論の発展の方向」研究口頭発表ハンドアウト.

小野正敦 (1985):「照応に関する一考察」『フランス語学の諸問題』, 東京, 三修社, p. 204-209.

坂原茂・三藤博 (1988):「メンタル・スペース理論と名詞句解釈のアルゴリズム」, 『談話・意味・語用論』(昭和62年度科学研究費特定研究).

東郷雄二・大木充 (1986):「フランス語の主語倒置と焦点化の制約・焦点化のハイエラルキー」, 『フランス語学研究』20号.

——— (1987):「非人称構文の談話機能について一倒置構文との比較をめぐって」, 『フランス語学研究』21号.

ZUBIN, D. A. (1979): « Discourse function of morphology: the focus system in German », *Syntax and Semantics 12*, New York, Academic Press.

NII-Electronic Library Service